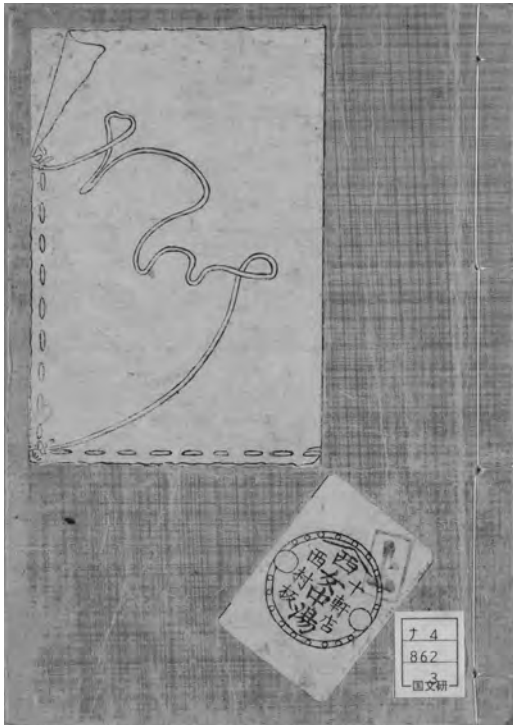


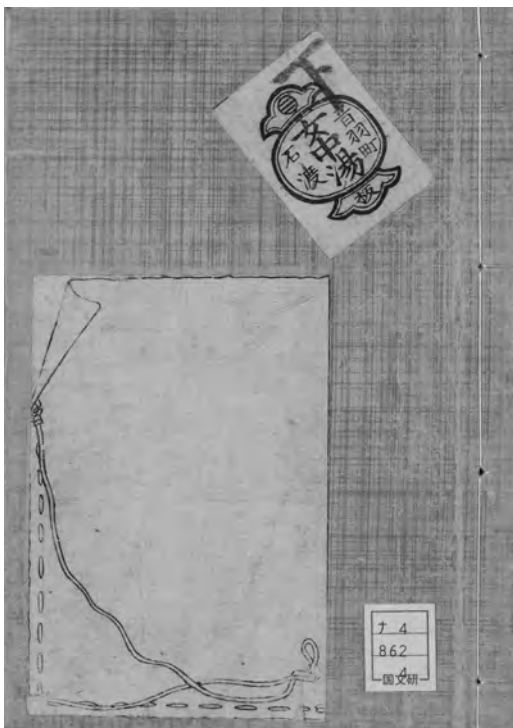
うき よ ぶ ろ
『浮世風呂』

—出現した二～四編の初印本—



『浮世風呂』(文化六十年(一八〇九)「三」刊)は、江戸の戯作者式亭三馬作で、十返舎一九の『膝栗毛』シリーズと並ぶ「滑稽本」の代表作です。『膝栗毛』が、東海道に始まって主要街道を旅しながら、主人公弥次喜多と行く先々の人々との会話内容のズレから生じるおかしみで笑わせるのに対して、こちらは銭湯に集まる様々な階層の老若男女の会話(または独り言)がいかにもそれらしく活写されて、笑いを誘います。本の大きさは、「中本」(約十八×十二㎝)と呼ばれるサイズで、文より絵が中心の草双紙をはじめ、滑稽本・人情本など軽い読みものは、皆「中本」型で作られています。

ところが、当時は娯楽読みものを貸本屋で借りて読むのがふう、そうでなくても基本的に読み捨てであり大事にされず、その結果、刊行当初のかたちをとどめた本(初印本)は、驚くほど少しか残っていません。そうした中で、当館新収の『浮世風呂』は、初編だけが他と違う取合本(改装表紙、手ズレが目立つが初印)ですが、二、四編は刊行時そのままの姿で、しかも二・三編は売り出しの時に熨斗紙のように本をくるむ「袋(書袋)」も紙製



『浮世風呂』二編上・下巻表紙

の帙に貼り付けられて残っている、奇跡のような本です。初編の初印最善本は現在天理図書館に所蔵されていますが、当館本とあわせて、本作の最も良質なテキストが全巻揃ったこととなります。ここでご紹介するのは、二編上下の表紙です(図)。格子縞模様をついた薄茶の地に白い別紙を貼り付け、上の右下(分銅のかたち)、下の右上(打ち出の小槌のかたち)には、それぞれ二編の舞台となる「女中湯」の周囲に上下巻の朱印と板元(西村源六・石渡平八)の住所・名前・屋号、上の左上、下の左下には、それぞれ女湯に欠かせない糠袋がデザインされ、浮世絵ではよく女性が口にくわえた姿で描かれる紐の、少しもつれたかたちが、上は「大叶」と読めます(下は残念ながら不明)。本作のヒット祈願なのですが、作者・絵師(小川美丸)のセンスを感じさせる、さりげなく凝った作りになっていると思います。こうした装丁の面白さも戯作鑑賞のポイントのひとつと分かっていただくためにも、善本を探索して多くの方に見ていただくことは、国文研の大事な役割と考えています。(大高洋司)